問題１

70歳男性。X年2月に膀胱癌術後の経過観察目的に撮影されたCTで胃弯隆部～胃体上部に約25mmの腫瘍を指摘され、精査加療目的に当科紹介となり超音波内視鏡検査を行った。

【入院時現症】

身長169.8 cm 体重74.6 kg BMI 25.87 血圧 124/79 mmHg 脈拍 80/分

腹部は平坦・軟。腫瘤は触れない。

【既往歴】

膀胱癌、尿管後部尿管癌、高血圧、糖尿病、盲腸術後

【アレルギー】

なし

|  |  |
| --- | --- |
| 【腹部造影CT(X年2月)】 |  |
|  |  |
|  |  |
| 【上部消化管内視鏡像】 | 【EUS-FNA時エコー】 |
|  |  |

超音波内視鏡下穿刺吸引生検法(EUS-FNA)でGISTの診断となった。

（１）この疾患の特徴として適当なものはどれか。1つ選べ。

a.胃粘膜下腫瘍の一つである。

b.転移を起こすことはない

c.大部分にc-kit遺伝子変異を認めない。

d.CEAの上昇が見られる。

e.消化管間葉系腫瘍の約5%を占める。

（２）この疾患について適当なものはどれか。2つ選べ。

a.内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)で完治が期待できる。

b.5cm以下なら経過観察とする。

c.切除可能な場合は外科的切除が第１選択となる。

d.化学療法にはチロシンキナーゼ阻害薬を用いる。

e.*H.pylori*が発症に関与している。

問題２

【症例】44歳男性。

【現病歴】

X-1月より飲酒量が増え、体調不良を自覚していた。X月10日頃から黒色便と言動の異常が見られた。暗赤色の嘔吐を数回し、呼吸苦・ふらつきも出現したためX月14日の夕方にA病院を受診した。上部消化管内視鏡検査が行われ、食道静脈瘤からの出血を認めたため、内視鏡的静脈瘤結紮術(EVL)にて止血を行った。医療機関の受診歴が無い方であったが、長期に渡る飲酒歴もあることから肝硬変が背景にあり、飲酒量の増加と上部消化管出血により急性肝障害を来していると考えられた。その後A病院にて輸血などの全身治療により徐々に肝障害の改善を認めていたが、アルコール性肝硬変と食道静脈瘤の追加治療のためにX月18日、当院へ転院となった。

【既往歴】

なし（医療機関や健診等の受診歴なし）

【アレルギー】

なし

【生活歴】

喫煙：10本/日

飲酒：16歳時から日本酒 500ml/日 最近は1~1.8L/day

【入院時現症】

身長172.5cm 、体重70.7kg、体温37.4℃、血圧111/85mmHg、脈拍84回/分

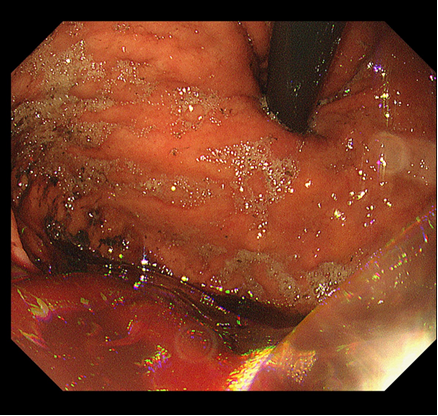
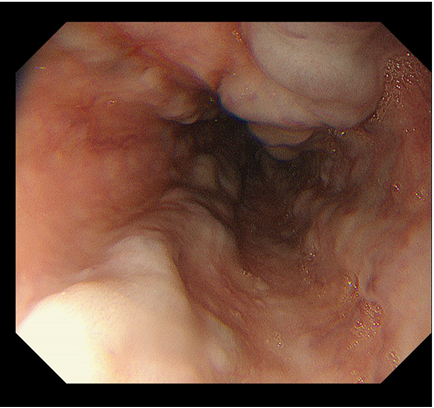
意識清明。眼球黄染(+)、羽ばたき振戦なし、腹痛なし

【検査所見】

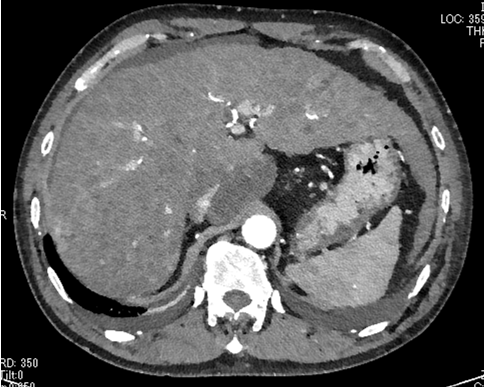
白血球 8530/μl（基準3300~8600）、赤血球 239万/μl（基準 435~555万）、Hb 8.9 g/dl(基準 13.7~16.8)、Ht 25.4 %(基準 40.7~50.1)、血小板16.3万/μl(基準 15.8~34.8万)、PT% 80(基準 70~130)、総蛋白 8.0g/dl(基準 6.6~8.1)、アルブミン 2.5 g/dl(基準 4.1~5.1)、総ビリルビン 5.5 mg/dl(基準 0.4~1.5)、AST 402 U/L(基準 13~30)、ALT 165 U/L(基準 10~42)、ALP 117U/L（基準 38~113）、γ-GTP 959 U/L（基準 13~64）、CRP 2.9 mg/dl(基準 0.14以下)、BUN 13mg/dl(基準 8~20)、Cre 0.92mg/dl(基準 0.65~1.07以下)、NH3 68μg/dl(基準 12~66)

HBs抗原(-)、HCV抗体(-)

【上部消化管内視鏡】



【腹部CT画像】



1. Child-Pugh分類の点数を出せ。

a.2点

b.5点

c.8点

d.10点

e.13点

1. 静脈瘤に対しての治療を、静脈瘤の局在と肝機能を踏まえた上で選べ。
2. 経口内視鏡的筋層切開術(POEM)
3. 内視鏡的硬化療法(EIS)
4. 内視鏡的静脈瘤結紮術(EVL)
5. バルーン閉塞下逆行性経静脈的塞栓術(BRTO)
6. 外科的治療